



センターでのリハビリ

健 伊澤

シブサワ・アンド・カンパニー 代表取締役

小学2年生から大学卒業まで米国で育った私にとって、日本社会へのリハビリの場は「センター」であった。と、いつてもこれは福祉施設ではない。

日本国際交流センターという、

市民社会を通じて日本と世界の相互理解を促すことを目的とする非政府・非営利の財団法人だ。今でいうフリーター気分で帰国し、当時の日本企業ではまったく使えない私を拾ってくれたサンクチュアリで

あった。

電話対応の際に、会ったこともない受話器の先方から「お世話になっております」と言われ、首を傾げた愚か者。世話になったのが自分本人ではなく、会社全体であると気づ

くまでしばらく時間が必要だった。特に疲れるような仕事ができているのに、別れる際に「お疲れさま」と声をかけられるのが不思議だった。

ただ、当時の日本は疲れていなかった。郷ひろみが「エ

キゾチック・ジャパーン！」と熱唱していた元気な1980年代。ジャパニーズ・ミラクルを学ぶために外国の視察団が次々と来日し、私はカバン持ちとして多くの会合に同席する幸運に恵まれた。財界において国際派の代表格であったソニーの盛田昭夫さんの英語力は、お世辞にも上手とはいえなかったが、その熱弁に外国人たちは熱心にうなずいていたことが強く印象に残っている。外国とのコミュニケーション力は、必ずしも英語力と一致しないという大切なことを教えていただいた。



私の思い出館
写真

センターでは大勢の良き先輩たちにご指導をいただいた。その中でも、私の師匠は高久裕さん（写真前列右）。元ラガーマン、元新聞記者の机の上はいつも大混乱。しかし驚くことに、仕事のポイントはいつも押さえていた。自分がポカをしても励ましていただき、また人前で「コイツはいつか偉くなりますよ」と誉められて、赤面したことがある。まだまだご期待に応えられないが、今後も末永くお付き合いを願いたい。

